

## セラピードッグ動物介在療法 ～人と犬との命の共存～

大 木 トオル\*

一般財団法人 国際セラピードッグ協会 代表



### 著者プロフィール

音楽家、一般財団法人 国際セラピードッグ協会 代表、一般社団法人 大木動物愛護協会代表、弘前学院大学客員教授  
東日本被災犬保護プラザ代表、社会福祉学者（日米）  
ユニテッドセラピージャパン INC 代表

東京日本橋人形町生まれ、1976年渡米、米国在住。全米音楽界で唯一、東洋人ブルースシンガーとして全米ツアーを成功させるなど、人種の壁を乗り越えて世界的に活躍する。

ゼネラルプロデューサーとしても多くのビッグアー

ティストを育て、日米のブラックミュージックの架け橋として長く活躍、「ミスターイエローブルース」と称賛される。

一方、動物愛護家として日米の友好・親善に貢献。捨て犬と被災犬達の救助と共にセラピードッグ育成のパイオニアとして日米の動物愛護の普及を40年にわたり行い、動物愛護法の改正に大きく貢献している。又高齢者施設、障がい者施設、病院、教育の現場などで活動し、多くの症例と成果を出している。セラピードッグ訓練カリキュラムの考案者として活動中。

### 【著書】

『チロリものがたり』（絵本塾出版 2017年）、『チロリ』（トゥーヴァージンズ 2016年）、『伝説のイエロー・ブルース』（トゥーヴァージンズ 2015年）、『チロリのまなざし 奇跡をおこすセラピードッグ』（リーブル出版 2014年）、『がんばれ！名犬チロリ』児童推薦指定図書・全国読書感想文指定図書（岩崎書店 2014年）、『わが心の犬たち』（三一書房 2013年）、『風になった名犬チロリ』（岩崎書店 2013年）、『いのちをつなぐ』児童推薦指定図書・全国読書感想文指定図書（岩崎書店 2012年）、『名犬チロリ～日本初のセラピードッグになった捨て犬の物語～』（岩崎書店 2011年）、『動物介在療法 セラピードッグの世界』（日本経済新聞出版社

\* Corresponding author:

一般財団法人 国際セラピードッグ協会

〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-13 エリザベスビル4階

Tel : 03-5537-2815

Fax : 03-5537-2817

HP : <http://www.therapydog-a.org/> E-mail : [info@therapydog-a.org](mailto:info@therapydog-a.org)

2009年),『アイコンタクト ～最強のセラピードッグ名犬チロリ写真集～』(バットコーポレーション2006年),『名犬チロリ』(マガジンハウス 2004年),『キラ星たちのレクイエム (鎮魂歌)』(誠文堂新光社 1998年),『伝説のイエロー・ブルース』(文藝春秋 1983年/講談社 1993) 等ベストセラー多数  
【音楽CD (ソニーレコード, エイベックスレコード, ドリーミュージック) 多数】

セラピードッグは動物介在療法として人の治療に役立つために育成され医療の現場で活躍する犬たちで、アメリカでは約七十年以上の歴史があります。

高齢者施設, 病院, 障がい者施設, 児童施設などで活躍し医療の現場に大きな成果をもたらしています。

下町日本橋人形町に生まれ育った私は、4歳の時に吃音障がいが発覚しました。戦後すぐの環境の中、人とうまくコミュニケーションができない辛い時期がありました。その時に唯一話し相手となり心の支えになってくれたのが我が家にいた雑種の愛犬でした。愛犬は私が名前をつかえながらも呼ぶことができるとテールを振り、私の口元を喜びながら舐めてくれました。人は私の言葉を待ってくれませんが、愛犬はいつまでも私の話す言葉をずっと待ってくれました。

10代の時、ラジオの米軍放送 FEN から流れるアメリカンミュージックをよく聞いていました。音楽を聞きながら片言の英語で歌を口ずさむとつかえずに歌えるのでした。それをいつも見ていた祖父は、歌を歌



幼少期の大木代表と愛犬

うことを勧めてくれたのです。

こうして私は犬に心を支えられ、歌で吃音障がいを克服していったのです。

その後、音楽家としてアメリカへ移住し歌を職業にしました。そこでセラピードッグと出会いました。

アメリカでは自分の職業に加えて、もうひとつライフワークとして社会のために何をしているのかということ问われます。私は幼少期、犬に助けられた経験から社会福祉のためにセラピードッグ育成をライフワークとしていくことを決意しました。

現在、捨て犬と被災犬を救助しセラピードッグに育成する活動をライフワークとして40年、そして音楽活動は50周年を迎えます。

日本で初めて捨て犬からセラピードッグになったチロリとの出会いは私にとっても大きな転機をもたらしてくれました。

チロリは、後ろ肢に障がいがあり左耳が垂れ、雑種であり捨て犬だったため子犬の時からルーツが分かっていません。大きなハンディキャップを抱えていました。しかしチロリはそうしたハンディを乗り越え通常2年半かかるトレーニングを半年でクリアしました。そしてセラピードッグとしてたくさんの愛情と希望を人々に与え続け、日本のセラピードッグ第一号として社会福祉の現場で大きな貢献をしてくれました。

チロリは、乳がんで2006年3月に亡くなりました。その後、チロリの功績が認められ、銀座の築地川銀座公園に名犬チロリブロンズ像が建ちました。そして多くの書籍や絵本, 教科書や切手になり後世に語りつがれています。

どんな犬でも計り知れない能力を持っています。現



U.S.A セラピードッグ活動

在日本では約5万頭以上の捨て犬・捨て猫達が殺処分されています。先進国として恥ずかしい数字です。私は、殺処分寸前の捨て犬を救助しセラピードッグとして育成することで、日本から一日もはやく殺処分廃止を実現させたいと考えています。

又東日本大震災以降、原発により被爆した福島

の被災犬達の救助にも力を注いでいます。被災した犬達が訓練を受けセラピードッグとなり、福島の仮設住宅の皆さんの元へ里帰りをして活動を続けています。被災者の皆さんは大変喜んでくれ、「よく福島に帰ってきて



名犬チロリ



殺処分寸前の捨て犬達を救出する大木代表



被爆した被災犬の除染



名犬チロリ記念碑 築地川銀座公園



福島の仮設住宅でのセラピードッグ活動

くれたね。」「又会おうね」とセラピー犬達に声をかけてくれます。そして私は「又会いましょう」と声をかけます。そうすることで生きる希望を持ってもらうことができるのです。

過酷な環境から救出された捨て犬、被災犬達は「痛み」を知っています。痛みを知っているからこそ苦しんでいる人々の痛みを共有し、純粋な心で人に接することができるのです。だからこそ人は、セラピードッ



被災者と被災犬「日の丸」との絆



チロリとのふれあい

グから生きる勇気をもらい、犬たちの無償の愛情が心に響くのです。

高齢化社会が深刻化している現代の日本で、セラピー犬へのニーズは大変多くなっています。現在東京都中央区では年間約4,000名、全国では年約12,000名の高齢者、障がい者の心身のケアにあたっています。今までリウマチで動かなかった手がセラピー犬を触ろうとすることで動くようになります。笑顔が全くなかった人がセラピー犬達とのふれあいで笑顔を取り戻します。言葉を発しなかった人がセラピー犬の名前を呼ぼうとする意欲から声を出すことができます。さらに一緒にセラピー犬と歩いてみたいという気持ちから車いすから立ち上がることにもつながります。このように患者の免疫数値を上げて、リハビリ効果を高めることができます。

人々の中で一番多い病は精神疾患です。つまり心の悩みです。不況のなかで多くの人が苦しむ一方、貧富に関係なく心の病が増え、苦しい立場に追い込まれる人が増えています。ささいなことで行き違いが生じて人間関係につまずいたり、理由もなく仲間はずれにされたり、親や周囲の期待に押しつぶされそうになった



車イスから立ち上がり歩行リハビリに励む高齢者

り、自分は他人より劣っているのではないかと落ち込んだり、いつまでもひとつの失敗を引きずったり、人はさまざまなことで悩みます。悩みから不眠になり、心身のバランスを崩していきます。病院から処方された睡眠薬を飲んで数時間眠ることができるようになります。しかし目覚めても心の悩みは治っていません。心の悩みに効く薬は無いのです。

そこに訓練を積んだ愛情のぶれない純粋な心を持つセラピードッグ達が、薬や手術で対応できない心の問題に働きかけて、生きる希望を与えてくれます。

現在全国でセラピードッグ達が必要とされ、日本の医学に大きな関わりを持つようになっていきます。

天国のチロリが教えてくれたことがあります。それは、

「命あるものは幸せになる権利がある」ということ。

憎しみで生まれてくる命はありません。必ずだれかが祝福してくれています。

生きることを絶対にあきらめてはいけません。

環境や出会いで様々な状況へ変化します。向かい風が吹いていても、いつかそれが追い風になるときがあります。そのときまで、くさらず、ふてくされず、自



笑顔を取り戻した高齢者

分の信じることを続けることが大切なのです。

努力を「続けること」、やりたいことを「貫くこと」、それがいつか周囲の人や環境を変えるときがきます。周囲の目や周りの意見に振り回されるのではなく、自分の弱さや弱点も個性にとらえ、人に勝つ生き方ではなく、人の役に立つ生き方に喜びを求めて生きることのほうが、どれだけ充実しているかわかりません。そのことを、ひとりでも多くの生徒のみなさんに感じて欲しいと思います。

犬たちを信じることによって、私は人生のなかで直面した大きな問題を解決することができました。私は、犬たちによって救われたといっても過言ではありません。

生きとし生けるものは、それぞれの生きる意味をもって生まれてきています。だから、まず自分の存在を肯定し、自分を愛し、そして人を愛する。自分自身への愛がしっかりしないと人や動物への愛も揺らいでしまいます。自分を愛し人を愛するところから、人へのやさしさやいつくしみの心が育まれてきます。自分を愛し人を愛そうとするところに、いじめや引きこもりを解決する道が拓かれると思います。

多くの人が人に勝つ生き方ではなく、人の役に立つ生き方の喜びを求めて生きようになり、人間の家族として犬と心を通わせ、必要な教育をし、これまでの「飼育」という発想から「ともに暮らす」という視点でつきあい、殺処分のない人間と犬との新しい関係を築くことができる日を私は夢見ています。



救助された捨て犬・被災犬達  
(一財) 国際セラピードッグ協会